

写真家・植田正治の物語

蔦谷典子（島根県立美術館主席学芸員）



掲載作品は植田正治作
© Shoji Ueda

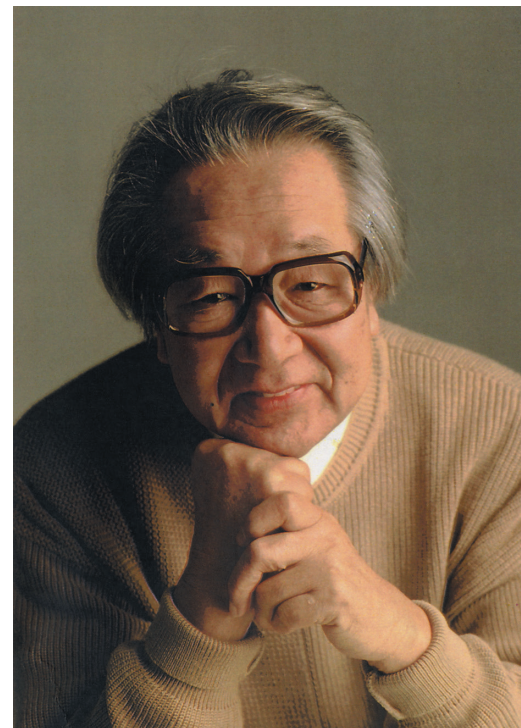
*「生誕百年 UEDA-CHO 植田調 ①～⑤」
として山陰中央新報に5回連載された記事
(2013年3月27日～4月24日)をもとに一部
改稿した。

発行:島根県立美術館 2020年9月10日
島根県立美術館 © 2020

表紙
《ババとタッチン》1949年 島根県立美術館蔵



〒690-0049 島根県松江市袖師町1-5
TEL:0852-55-4700 FAX:0852-55-4714
<https://www.shimane-art-museum.jp>



植田正治の肖像写真 撮影・沼田早苗 © Sanae Numata

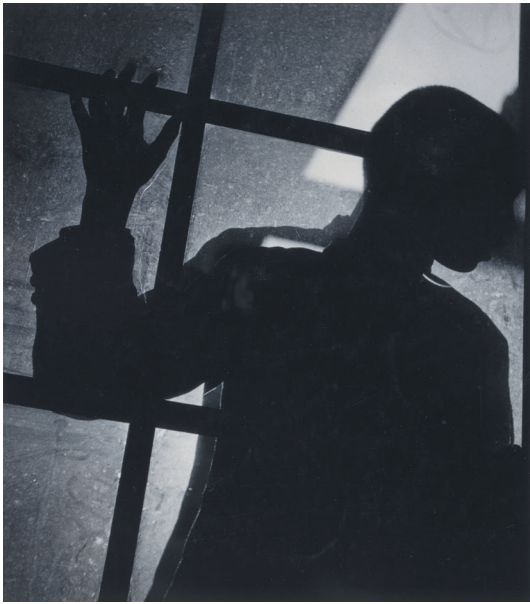
植田正治 年譜

- | | |
|-------|--|
| 1913年 | 3月27日、鳥取県西伯郡境町(現・境港市)に生まれる。 |
| 1927年 | 鳥取県立旧制米子中学校3年の頃から写真に夢中になる。 |
| 1931年 | 米子写友会、日本光画協会に入会。
本格的に写真の道を目指す。 |
| 1932年 | 上京し、オリエンタル写真学校などに通う。
帰郷後、写真館を営む傍ら、写真雑誌の月例懸賞に次々と入賞し頭角を現す。 |
| 1937年 | 「中国写真家集団」結成に参加。年1回の東京展に戦前の代表作
《少女四態》(1939)、《茶谷老人とその娘》(1940)などを次々と発表する。 |
| 1945年 | 終戦。中断していた写真が再開できる喜びをかみしめる。 |
| 1947年 | 「銀龍社」が結成され、石津良介の呼びかけで緑川洋一とともに参加。
生涯の友となる秋山庄太郎、林忠彦らと出会う。 |
| 1949年 | 桑原甲子雄が編集長の『カメラ』(アルス)に代表作《綴り方・私の家族》が掲載。
また同誌企画による土門拳とのカメラ対決が山陰で開催される。 |
| 1971年 | 『童暦』(『映像の現代』第3巻・中央公論社)刊行。
『カメラ毎日』編集の山岸章二により、新進気鋭の写真家たちによる
『映像の現代』シリーズに、戦前からの写真家としては唯一植田が抜擢される。 |
| 1973年 | 「植田正治写真教室」、『アサヒカメラ』に連載がスタート。
その後「植田正治写真作法」(1974年『アサヒカメラ』連載)
「アマチュア諸君!」(1978年『カメラ毎日』連載)など、写真の啓蒙記事の連載が相次ぐ。 |
| 1974年 | 《小さい伝記》『カメラ毎日』の連載開始。
『音のない記憶』(日本カメラ社)刊行、日本写真協会年度賞を受賞。 |
| 1978年 | フランス、アルル、フォト・フェスティバルに招待される。 |
| 1980年 | 第16回フォトキナ写真展(西ドイツ、ケルン)に日本の写真家11人のひとりとして出品。 |
| 1988年 | 第2回国際写真フェスティバル「フォト・フェスト'88」(ヒューストン、アメリカ)に
招待作家となり、個展開催。 |
| 1995年 | 植田正治写真美術館(鳥取県西伯郡岸本町、現・伯耆町)開館。 |
| 1996年 | フランスの芸術文化勲章シュヴァリエ受章。 |
| 2000年 | 7月4日、逝去。 |

1 抒情とモダニスム―写真家としての出発

山陰に生まれ、生涯山陰に暮らし、山陰を舞台に写真を撮り続け、日本を代表する写真家として第一線で活躍し続けた写真家・植田正治（1913・2000）。その国際的な評価はますます高まっている。「UEDA・CHO（植田調）」と称されるその独特のスタイルによって、時代も国も超えて、植田の写真は愛されている。70年という長い写歴のなかで作風は変遷しても、「貫しているのが、この「植田調」である。まずは、その発端をご紹介します。

それは、植田が本格的に写真をはじめた頃にさかのぼる。画家を目指して美術学校進学を志望するが、ひとり息子に上京されては大変と両親に反対され、その頃夢中になっていた写真を生かして、実家で写真館を開くことで折り合いがついた。その後、写真館主をしながらも、自分の写真づくりに夢中だった植田は、朝夕自転車で近隣を走り、日中もお手伝いさんに留守番を頼み、撮影に没頭した。客がくるとお手伝いさんが



《シルウエット》1936年 島根県立美術館蔵

＊逆光で撮影すると、細部が消えて図と地のみの単純な構成となる。この頃、植田はこの効果を多用し「逆光の時代」と自ら名付けた。この作品は、『写真サロン』『創刊記念特別大懸賞で1等3席となった。

2 砂丘群像演出写真の誕生―中国写真家集団のなかで

《浜の少年》（1931）で『アサヒカメラ』の口絵ページを飾ったのを皮切りに、植田正治は、新たに創刊された『写真サロン』をはじめとする写真雑誌の月例懸賞に応募し、目覚ましい活躍を展開する。写真雑誌の月例懸賞、これは雑誌を舞台として毎月行われる全国写真コンクールである。『写真サロン』『審査員・斎藤鶴児の名批評に投稿者たちは沸いた。東京では、桑原甲子雄がライカを手に颯爽と現れ、埼玉県熊谷には好敵手・佐藤虹児がいた。雑誌に掲載された写真を知っているだけで、会ったこともないライバルたちと、毎号勝負に挑む。

当時中国地方は、岡山に石津良介、広島に野村秋良・正岡国男らが、植田同様に活躍しており、石津良介の呼びかけで、「束になって、花のお江戸に殴り込みをかけよう」と、「中国写真家集団」を結成し、年1回の東京展を開催した。そのなかで、植田の戦前の傑作が生みだされていく。

この頃、絵画のシュルレアリスムや抽象の動きに照応する



参考図版:《少女四態》1939年 植田正治写真美術館蔵
第3回中国写真家集団展覧会出品作



参考図版:《茶谷老人とその娘》1940年 米子市美術館蔵
第4回中国写真家集団展覧会出品作

「旦那さんー」と大声で呼ぶ。すると、畑から植田がひょっこり頭を出すという具合だった。

大正末から昭和初期にかけて、日本独特の発展を遂げた絵のような写真「芸術写真」。植田はまず、この「芸術写真」に夢中になる。山陰では、鳥取県赤碕の塩谷定好が、近隣の海浜風景を軟調描写で撮り続け、写真雑誌の月例懸賞で常に全国上位に入選し、植田の憧れの的になる。また自分のしたいことを具現化してくださったと最も私淑した東京の渡辺淳は、白が滲むように広がる濃淡のコントラストのなかに、幼い少女がちよこんと佇む童画のような至純な世界を創り上げた。それは植田の心に残々までも深く残った。植田らの所属した日本光画協会は、前衛的な洋画壇の動きを取り入れ、岸田劉生風の花をもつ少女像や、アンリ・ルソー風のユーモラスな人物像などが好まれ、油絵具による描き起し、極端なデフォルメ、素粒子表現など、表現主義とも称される大胆な作画が試みられた。身近な生活感情を重視し、自然や人々を慈しむ、抒情に満ちた童画のような芸術写真の世界から、植田は出発している。

郷愁をそそる芸術写真の世界に心酔していくのとほぼ同時に、「植田調」のもうひとつの重要な源となるモダニスムの洗礼を、植田は18歳の時に受けている。佐陀神社の祭礼の日に、松江の今井書店で一冊の写真集『モダン・フォトグラフィ』（1931）を父親から買ってもらった。ここには、マン・レイ、エドワード・スタイクンをはじめ、1920年代から30年代の両大戦間に勃興した近代写真のまさに最前線の名作群が掲載されていた。「新興写真」の名で全国に広がるこのドイツのパウハウスを震源とする新しい写真の波に、植田は圧倒され、近代写真の追求に邁進することとなる。

前衛写真が、芦屋・丹平・浪華の関西勢を中心に台頭してきた。植田はこの動きと距離を置きながらも、現実世界にのぞく超現実的な面持ちへの興味を示した。そして、芸術写真のように絵画風の作風のポーズで重厚感をもたせるのではなく、「もっとスラリと撮ってしかも迫力ある作品」が作れないものかと思案した。そして出来上がったのが《少女四態》だった。これは、境港の自宅近くの浜で、ポーズをした少女たちを、空と砂浜のつくりだす空虚な空間にオブジェのように並べた。《茶谷老人とその娘》は、島根県の恵曇海岸で、個性的な父娘を画面の両端に配置した絶妙な構成をとった。

芸術写真の抒情性と近代写真のモダンな空間を止揚し、シュルレアリスムの現実でありながらどこか不可思議な面持ちが加味され、植田の群像演出写真ができていく。

植田は、山陰で一番になってやろう、中国地方で一番になってやろう、そして日本で一番になってやろうと、ひとつひとつ夢を膨らませていった。しかし、その切磋琢磨した中国写真家集団の活動も戦争で終焉を余儀なくされた。特に広島は原爆によって壊滅状態となった。中国写真家集団の仲間・野村秋良は、カメラを胸に原爆で亡くなった。

戦争で写真を中断せざるをえない約10年間を経て、朝日新聞の社告に掲載された写真募集の記事を見て、植田は涙した。戦後の動乱のなか、ライカをも



《タンボポ》1936年頃 島根県立美術館蔵

植田は「もの好き」を自認し、新しいものが大好きだった。まだ珍しい熱帯魚を飼ってみたり、新種の蘭を栽培したり。この一冊の写真集に繰り広げられる、カメラの精緻な眼で切り取られたシャープな形態、大胆なアングルで画面を構成する手法、遊び心溢れる洗練された空間など、その最新の表現から、植田はモダニスムの感覚を掴み取り、時代を経ても新鮮さを失うことのない強靱な自らの感性を研ぎ澄ましていく。

芸術写真から新興写真へ移り変わる時期に、植田は写真家としてのスタートを切った。芸術写真のもつ、ぬくもりとはかなさを秘めた抒情、近代写真のモダンな空間、そして植田独特のユーモア、これらが豊かな土壌となって、生涯を通じて「植田調」と称される詩情あふれる空間が作られていく。

《タンボポ》は、日本光画協会の得意とした《花をもつ少女》の流れを汲みながら、背景を黒と板塀で直線的に仕切り、丸い綿帽子とそれを見つめる少女の眼差しのみに表現を集約させたトリミングによって、モダンな空間となっている。モデルは愛妻・紀枝である。

とめて、満員電車につかまって大阪まで行った。植田の写真することに對する、すべてを投げ打つ真摯な熱意は、様々な時代の変遷のなかで、生涯変わることはない。写真の世界で常に第一線に立ち続けることができたのは、植田の写真に對するこのひたむきな愛情と熱意があつてのことだと思ふ。



《狆》1938年 島根県立美術館蔵 第2回中国写真家集団展覧会出品作



《パパとトッチン》1949年 島根県立美術館蔵



《パパとママと子どもたち》1949年 島根県立美術館蔵



《カコ》1949年 島根県立美術館蔵



《へのへのもへの》1949年 島根県立美術館蔵



《土門拳と朝倉君》1949年 島根県立美術館蔵

戦後の焼け跡のなかで、プロ写真家とアマチュア写真家、また写真雑誌の編集者がともに「銀龍社」を結成した。中国写真家集団のメンバーだった石津良介の声掛けで、植田正治は、岡山緑川洋一とともに銀龍社に参加する。銀龍社は、銀座の赤穂英一宅を根城に、一人一党、共通の主義主張などない自由で闊達な雰囲気の中で、『日本カメラ』の創刊へ、また二科会写真部の創設へと展開していき、まさに戦後の写真界の復興を担っていく。植田は、この銀龍社で生涯の友となる秋山庄太郎、林忠彦らと出会う。

銀龍社のメンバーのひとり桑原甲子雄が編集長をしていた『カメラ』（アルス）で、1949年、山陰を舞台に土門拳と植田正治の写真対決が企画された。土門拳はぶきみである。土門拳のレンズは人や物を底まであばく」と詩人であり彫刻家の高村光太郎に言わしめた逸材の山陰来訪である。まず土門一行は松江で、植田の戦前の名作に敬意を表し、恵曇海岸の茶谷老人に表敬訪問をしている。翌日は鳥取砂丘を舞台にカメラ対決となった。『巖流島の闘い』と称された剣豪・土門拳、対する山陰の雄・植田正治である。

この翌年から、土門拳は『カメラ』の月例審査員となり、全国のアマチュア写真家たちを熱狂させた伝説の土門月例がスタートする。「絶対非演出の絶対スナップ」を掲げ、リアリズム写真運動を強力に推進していく。植田の演出写真とは、真向から対立する主張である。

しかし、ふたりは意気投合した。土門は、名高い山陰の植田正治とは、いったいいかなる人物であるか、と山陰にやってきたところ、あの柔和な微笑みの恥じらいある紳士とわかり、おもわず惚れてしまったというラブレターを雑誌に掲載した。植田は親切に土門の砂丘撮影の手助けをしている。そこで撮影されたのが、『土門拳と朝倉君』である。野武士のような風貌で圧倒的な存在感をもつ土門拳と、つき従うけなげな助手・朝倉君が微笑みを誘う。

『カメラ』の翌月号には植田の『綴り方・私の家族』の特集が生まれ、『パパとママと子どもたち』をはじめとする植田の代表作が娘・カコのかわいらしい作文とともに掲載された。手に手に好きなものをもって、近所の砂浜に一行に並ぶ植田自身の家族。再び写真が撮れる喜びと家族の愛情あふれる砂丘群像演出写真の傑作である。植田の砂丘劇場は、ひとつの頂点に達した。

この頃、植田のもとには、山陰の新進気鋭の写真家たちが集まり、「写真家集団エタン派」を結成していた。大篠津に帰っていた杵島隆、松江の井上喜弘・宏通兄弟など、植田の周りには、いつも写真する仲間が集った。家族の愛情と仲間たちとの友情のなかで、植田の写真は創られていく。植田の写真のぬくもりは、ここからもきている。

この年、松江の井上の店先で、植田正治の活躍を聞きながら、桶の中でネガがうなぎのように水洗されているのをながめていた、ひとりの少年がいた。「植田正治のような偉い写真家になれるといいね」と声を掛けられたのを記憶している。松江高校在学中の奈良原一高である。彼はこの7年後に初個展「人間の土地」で、写真界を震撼させる鮮烈なデビューを飾ることとなる。



《パパとママと子どもたち》1949年 島根県立美術館蔵

4 山陰を舞台に―愛すべき美しい自然と素朴な人々

1950年代、「絶対非演出」を奉じるリアリズム写真運動の旋風が吹き荒れる最中、植田正治は演出写真を撮り続けることに迷いを生じ始める。そして、新たに勢いを得た主観主義写真の手法で、伝統的な農具や民家などの抽象的な形態に着目した即物的な写真をしばらく撮り続けていた。山陰の風土を抒情的に写した作品を発表しても、「いつまでたっても、夕焼け小焼けの赤とんぼでは仕方がない」といった辛辣な批評を受け、深く傷ついた。

しかし、植田は山陰を撮り続けた。そして60年代、植田の風景写真は、自然の懐深くに沈潜した幻想的な心象風景として、より深く、より豊かに、その振幅の幅を広げていく。《山陰秋譜》など後に写真集『童暦』に結実する一連の作品を契機として、植田の作風は変わっていく。植田自身、それらの作品がひとつの啓示となり、「日本の郷愁の見事な抽象化」と再評価された。

植田のなかで、山陰を撮り続ける意味も変わっていった。単に自分が生まれ暮らしているから撮影するのではなく、生涯山陰を撮り続けるのは、植田にとってそれが日本で一番美しいところであり、「この地方の愛すべく美しい自然と素朴な人情が、私の写真する気持をとらえて放さないからです」と記している。日々眼にする海は千変万化の表情をもち、その美しさは格別である。人々は素朴で温かく、農家の軒先ではお茶を勧められ、子どもたちは植田の指示で無邪気にポーズをとる。60年代頃からは車で撮影に向かうようになり、植田の撮影範囲も広がった。山陰の海岸線や山里をくまなく歩き尽くし、季節や天候による変化も、年中行事もすべて把握した。気に入った場所には、その被写体の本質を見極めるまで何度でも通った。こうして、知り尽くした山陰全域が植田のスタジオとなる。

《新出雲風土記》(1964)の連載も始まり、出雲をテーマに本格的に取り組んでいく。「三身の綱うちかけて、霜黒葛く

るやくるやに、河舟のもそもそるに、国来国来と」と『出雲国風土記』に記される「三身の綱」が「夜見ノ島」となり、陸続きとなって「夜見ヶ浜」即ち「弓ヶ浜」と呼ばれ、その先端の境港に植田は生まれ暮らしている。出雲の国の広がりのおかげで、慣れ親しんだ地名に潜む歴史の数々に感銘を受けた。

出雲を含む山陰の風景のなかで、折々に植田は子供たちの姿をとらえていく。冬には、美保関町のとんど祭りや宅野の子供神楽、春の雛祭りや鯉のぼり、夏には大東町の七夕、御津の校庭で遊ぶ少年たち、秋は簸川平野の稲穂の黄色い波に築地松の緑が映えるのを楽しみながら、四季折々の子供の姿を写しとめていった。それらを纏めて写真集『童暦』(1971)が出来上がる。写真を始めた頃と同じ少年の心を生涯持ち続けた植田の曇りのない眼差しでとらえた作品群である。

日本の写真の60年代は、新しい才能が次々と現れ、鎬を削っていた。『カメラ毎日』の編集をしていた山岸章二は、その慧眼で多くの俊英を発掘し、写真界で絶大な力をふるい、山岸天皇の異名をとった。そして、山岸の眼にかなった写真家たち、奈良原一高、東松照明、石元泰博、森山大道、深瀬昌久、横須賀功光、立木義浩ら、まさに日本を代表する最新鋭10人を集めて『映像の現代』全10巻が1971・72年に編纂された。その第3巻として、戦前から写真を撮っている世代としては唯一人、植田正治が抜擢されたのである。そして完成したのが『童暦』である。その時植田正治は58歳になっていた。

植田は生前、自分が常に日本の写真の第一線にいたことができたふたりの恩人として、中国写真集団から銀龍社への道筋をつけてくれた石津良介と、70年代日本を代表する最前線の写真家のなかに植田を取り上げた山岸章二の名を挙げていた。



《童暦》1958年 島根県立美術館蔵



《童暦》1964年 島根県立美術館蔵

《童暦》(左)は、校庭の桜の木を折って帰る腕白小僧という設定で、大根島の一本道で撮影している。はやし立てる友達がカメラを構えた植田の後ろにいる。お面をつけた暗れ着の少女が石畳に佇む写真は、松江の推恵神社で撮影された。「植田調」は、もはや、花曇りの空を緞帳に砂浜を舞台とした演出写真だけではなく、山陰の風土や自然をより深く濃く映し込み、郷愁を誘う風景へと広がりをもっていった。

5 「生涯アマチュア」を貫き、世界へはばたく

「正ちゃんは、葉っぱ一枚でも作品にしちゃうからな」。親友・秋山庄太郎は、植田をそう評した。車の上に、はらりと落ちた一枚の紅葉。それだけで、得も言われぬまろやかな空気に包まれ、抒情にあふれ、それでいてみじんのゆるぎもない、植田独特のスタイリッシュな空間が現出する。「植田調 UEDA-CHO」は、その普遍的な力を発揮し始める。そして、その世界を自在に広げていく。

山陰でないと写真が撮れないと旅嫌いだった植田を、ヨーロッパに誘ったのは、次男・充(みつ)だった。若き日の植田が断念した美術学校への夢を引き継いだ息子のことを、植田はうれしそうに語っている。ヨーロッパでは、植田自身が不思議に思うほど、違和感なく写すことができた。カメラを片時も離す

ことなく夢中になって撮っていた。そして、出版した『植田正治小旅行写真帖 音のない記憶』によって、植田は1975年、日本写真協会年度賞を受賞する。

1983年、愛妻を亡くして意気消沈していた植田を、ファッション写真の道に誘ったのも、アート・ディレクターとなった充だった。菊池武夫のメンズ・ビギの広告写真を引き受け、モデルを使って植田の思うまま自由に砂丘で撮影した一連の写真は、砂丘演出写真の本領を発揮し、実に清新な『砂丘モード』を創り上げた。それは、大きな話題となり、国際的な反響呼んだ。70歳の新進ファッション写真家の登場である。植田正治の世界は、国の枠も、時代の枠も、さまざまな枠組みを軽々と飛び越え、普遍的な力をもって多くの人々を魅了していった。

また、1970年代以降、「植田正治写真作法」(1974年)、「アマチュア諸君！」(1978年)など、アマチュア写真家へ向けて植田自身の文章と作品でつづる連載が、次々と写真雑誌に掲載された。植田は全国のアマチュア写真家の憧れとなる。しかし植田は、「巨匠」といった態度ではなく、あくまで読者の写真仲間という目線で、自らの写真を謙虚に語り、森山大道の登場に「度肝を抜かれた」時のように、新しい才能が出現することを願って、読者を鼓舞した。

何にも束縛されることのない自由な自己表現を獲得するという意味で、植田は「アマチュア精神」を生涯誇りとして高らかに掲げている。世代を超えた「植田好き」との交流は、植田の作品の魅力とともに、こうしたフランクで自然体で、少年のように尽きることない好奇心をもつ、植田の人間としての魅力が共感を

呼び、広まっていたといえよう。

さらに、アルル国際写真フェスティバル(1978年)、ケルンのフォトキナ(1980年)、ビューストンのフォト・フェスト(1988年)など、国際的な舞台でも、植田の作品は高く評価された。日本から世界へ飛び出した植田は、世界の写真史に確固たる位置を占める写真家・植田正治となった。

1995年には、植田正治写真美術館が開館する。逆さ大山「で知られる大山山麓の自ら購入していた地所に《少女四態》の形状をもとにして高松伸の設計で建設されたこの美術館は、芸術選奨文部大臣賞を受賞した。1996年には、植田はフランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエを受章している。

山陰を愛し、身近な人々を愛し、純粹に写真することを樂しみ、世界のUEDAとなった写真家・植田正治。2000年7月4日、植田を愛する多くの人々に惜しまれ、87歳の生涯を閉じた。植田の世界は、これからも世界中の人々から愛され続けることだろう。その魅力は色あせることはない。



《メンズ・ビギのためのファッション写真》1983年 島根県立美術館蔵



《メンズ・ビギのためのファッション写真》1983年 島根県立美術館蔵